日本近代文学史に果たした同人誌の役割について考える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学日本文学研究会 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮越, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21204

日本近代文学史に果たした同人誌の役割について考える

宮越　勉

はじめに、本誌第四十六号がなぜ五十周年記念号なのかを簡単に説明しておきたい。そもそも『明治大学日本文学』は、学生運動が激しい世相のなか、せめて研究の灯を消さないよう有志の院生・学部生が数名集まり、『明大日本文学』創刊号（昭和四十三年七月）を刊行したと聞いている。そして、誌名を『明治大学日本文学』と変更して第三号が刊行されたのが昭和四十五（一九七〇）年四月であった。爾来、第十号記念特集号（昭和五十七年）には当時の大学院授業担当であった大岡信先生（本多秋五先生退職後の私の指導教授であった）はじめ四名の先生方がエッセイを寄稿され、第三号から数えても五十年もの星霜を経ている名実ともに学外の研究者たちにも知れ渡っている研究同人誌として今日に至っている。なぜ研究同人誌かといえば、「学科」なら大学紀要を刊行できるが「専攻」なら大学紀要は刊行できないという事情に拠るという。が、今や本誌は明治大学文学科日本文学専攻の準機関誌として機能していて、ここに令和時代の始まりというある意味で区切りの時でもあり、第四十六号を五十周年記念号とした次第なのである。

そこで日本近代文学史においてさまざまな同人誌が果たした役割を改めて検証してみたいと思う。

尾崎紅葉、山田美妙、石橋思案、巌谷小波、川上眉山、廣津柳浪らの硯友社の機関誌である『我楽多文庫』（明18・5～明22・10）は通巻四十三冊に及ぶ日本最初の同人誌であった。最初は筆写回覧雑誌でやがて公売となり、ここを発条として上記の作家たちが文壇で活躍していったのである。『文学界』（明26・1～明31・1）は、『女学雑誌』から派生、独立した同人誌で、北村透谷や上田敏の評論、樋口一葉（客員格）の小説、島崎藤村の詩が主要な収穫であった。とりわけ樋口一葉の代表作である「たけくらべ」（『文学界』）明28・1～明29・1）は博文館発行の文芸雑誌『文藝倶楽部』の明治二十九年四月号に一括再載されたのであった。『白樺』（明43・4～大12・8）は、戦前の同人誌のなかで最長、最大の力を発揮したものであった。この同人誌は、小説、戯曲、小品、論文、評論、感想など多岐に渡るジャンルのものを掲載したが、その初期はとりわけ西洋美術の紹介でその功績は大であったといえる。白樺派作家といえば、武者小路實篤、有島武郎、里見弴、長與善郎らの名前が浮かぶが、やはり志賀直哉の存在は欠かせないものがある。初期の小説「網走まで」「剃刀」「范の犯罪」は今でもよく読まれているが、志賀が『白樺』が人道主義の色を濃くしていくことに反撥してか、『白樺』と距離を置くようになってからも、今ではその代表作の一つとされる名作短篇「城の崎にて」（大6・5）と、これまたその代表作の一つである名作短篇「小僧の神様」（大9・1）を同人誌『白

樺』に発表していたことにはいろいろな意味で注目すべきものがあるだろう。『奇蹟』も同人誌で、のちに私小説の代表者とされる葛西善蔵の「哀しき父」（大元・9、創刊号）がその文学史上の所産とされている。『新思潮』も同人誌で、第二次では谷崎潤一郎の「刺青」（明43・11）、第四次では芥川龍之介の「鼻」（大5・2）が今日でもよく読まれる名作として文学史上に印象付けられている。同人誌『青空』には梶井基次郎の「檸檬」（大14・1、創刊号）、さらに「城のある町にて」「路上」「Kの昇天」「冬の日」などが掲載されていた。太宰治の場合、その初期は同人誌を渡り歩き、同人誌『海豹』に「思ひ出」と「魚服記」を、季刊同人誌『鶴』に「葉」と「猿面冠者」を、同人誌『青い花』に「ロマネスク」を、同人誌『日本浪漫派』に「道化の華」をそれぞれ発表し、いずれもその第一創作集『晩年』（砂子屋書房、昭11・6）に収録したのであった。戦後は、本多秋五、平野謙、山室静、埴谷雄高、荒正人、佐々木基一、小田切秀雄の七名が創刊時の同人であった『近代文学』が日本近代文学史上で最大規模の同人誌となったのである。同人の文芸評論家、平野謙と本多秋五は明治大学で教鞭をとり、大学院担当でもあったことは、その教え子の一人であった私でなくともよく知られていることである。同誌に掲載され今日でもよく読まれているものに、安部公房の「壁―S・カルマ氏の犯罪」（昭26・2）、遠藤周作の「白い人」（昭30・5、6）などがある。つまり、同人誌は、同人たちが互いに切磋琢磨し、ここを発条として大きく羽搏いていく場となっていたのである。

現在の文学、および文学研究の衰退状況にあって、同人誌の果たす役割はいかほどのものがあろうか。文学、文学研究の衰退は一時的なものに過ぎないと思いたい。『明治大学日本文学』には、自由なのびのびとした心構えで熱を込め、学術論文を執筆、発表していってほしい。持続に優る力は他にはないのである。

（みやこし　つとむ・明治大学文学部教授）